慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	鈴木, 智之(Suzuki, Tomoyuki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.156- 158
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

鈴木　智之

自分は何のためにこの本を書いたのか。その執筆の「動機」をあらためて問い直す機会を与えていただいたように思う。牧野さんが的確にとらえてくださったように、本書の中心的目的のひとつは、他者理解の場面に「物語の力」を呼び戻すことにあった。例えば、唐突に不可解な逸脱的行為に及ぶ他者に対して「心の闇」という符牒を貼り付け、その行動の理解を「科学的」説明に委ねてしまうのではなく、人々の経験の積み重ねをたどることによって、その成り行きを「物語の形で」了解しようとすること。その、ある意味では当たり前の営みが、ひどく安易に、かつ暴力的に放棄され、回避されていく状況を問い直したいという思いがあったのだ。しかし、「語り」によって人々が共同化していく意味世界の可能性、もしくはそこに成立する「社会秩序」の正統性を自分が擁護したかったのかと考えてみると、素直にそうだとも言えない。「動機の語彙」、あるいは定型化された「物語の文法」を介して構築されていく「意味」への信頼を、僕自身がどこかベーシックなレベルで失っている。そのような「社会的に準備され、使いまわされていく言葉」の内に「他者」を包摂することはできないはずだという思いが、他方にはある。

そのあたりのあやふやさが、本書の論理的な弱さ、思考の不徹底になって表れているのではないかと、今になって思う。牧野さんは、「『心の闇』という言葉が呼びよせられる以前においては、起動原因と構築原因はスムーズに接続され、少年による殺人という行為は理解可能なものとされていたのだろうか」と問うている。確かに、類型的な「動機の語彙」の適用によって犯罪行為の物語化がなされ、それでひとまず（例えば、司法や報道の場で）事件が了解されたことになっていた場合でも、個別の行為の成り行きはしばしば不可解で、「理解しきれない」ものと感じられていたことだろう。きっかけとなった出来事（起動原因）が他ならぬその行為に結びつくプロセス（構築原因）を、確かに「分かった」と感じられるかどうか。それはいつの時代にも不確かなものであったはずだ。それでも、「心の闇」などという大仰な修辞的語句が動員されず、何かしらの形で「理解された」ことにされ、処理されてきたのだとすれば、そのことの方がよほど暴力的だったのだと言うべきかもしれない。

しかし、そうであればこそ、「動機」が不明に見える行為の主体について「心の闇」を語る、その言説行為の意味を考えてみなければならないだろう。そこには、理解可能性を基準として「包摂」と「排除」の一線を引き、「わけの分からない」行為の主体を「社会」の外部に放逐しようとする「意志」が感じられる。しかし、そのふるまいは同時に、その語り手たちを含めた「私たち」の世界がどこか決定的なところで「綻び」を見せていること、相互了解の成り立ちを安定化させる力を欠いていることへの「怯え」のようなものに動機づけられてはいないだろ

鈴木智之「著者リプライ」
『三田社会学』第 20 号（2015 年 7 月）156-158 頁

うか。僕が「心の闇」言説に関心をもち、その意味作用の変遷をたどってみようと思ったのは、語りの実践を通じて「とりあえず」お互いに分かったことにしながら、共同的な意味秩序を立ち上げ続ける「社会」の働きが、あからさまに破綻した場面に遭遇したように思ったからであり、またそのことに（僕自身を含めて）人々がひどく興奮していたように見えたからである。

では、「酒鬼薔薇事件」から 20 年近くが経とうとしている「現在」はどうなのか。これも、牧野さんが指摘しているように、少年や若者の犯罪をめぐって、「心の闇」という言葉がぶり返しのように使われていて、その言説が醸し出す風景に既視感を禁じることができない。しかし、その意味作用の形式において同型の修辞的効果を示しながら、「不可解な他者」の現れに（少なくとも僕は）同じような興奮を覚えることができない。その落差を一体どう受け止めればよいのだろう。「破綻」の日常化、と言うべきだろうか。「心」など「闇」に決まっているのであって、それが（事件をきっかけにして）露呈しているからと言って特に騒ぐようなことではない。それはただ迷惑なだけだ、と言わんばかりの雰囲気が流れている。もちろん、これはまだ印象論にすぎないのだが、そのあたりに探り当てるべき断層があるように思える。

同様の印象は、学生たちの反応にも感じることができる。本書の内容は、現在の勤務校で担当している「社会学理論」の講義の内容にもとづいているのだが、その場で、社会とは言葉を介してそのメンバーの「心」を「理解可能」なものに仕立て上げるところに成立するものなのだという話をすると、一定数の学生がうんざりしたような顔をする。そして、自分は他者の心なんて理解できると考えていない、自分が人を殺してしまった時にその「動機」を人に分かってもらえるとも、分かってもらいたいとも思っていないと言い始める。それを無理やりにでも共同化することを求めるような「社会」なんて「うっとおしい」だけだ、「物語の力を回復せよ」と言う「あなた」も「暑苦しい」だけの存在だと返してくる。決して多数派の声ではないのだが、そういうリアクションは常に、少なからずある。そして、僕自身もまた、彼ら／彼女らの反応の基底に流れる気分を了解してしまうところがある。僕たちが今「社会」というものの成り立ちを考えなければならないのは、こうした「気分」の上においてである。「物語の力」の回復を声高に叫ぶだけではどうにもならないし、かといってそれを断念してしまうわけにもいかない。そういう曖昧さの中で、僕たちは他者と関わり続ける。その危うさを、これからも考え続けていきたいと思う。

その他、具体的な検証課題として指摘された点については、今の時点で答えを返す準備がない。本書での分析は、対象を「新聞報道」だけに限って、言説編成の基本構造だけをつかみだそうとしたものであり、そこからもう一歩踏み込んで詳細な時期区分をしたり、分析対象を他のメディアに広げて間テクスト的な関係を明らかにしたりすれば、見えてくるものも大きく変わっていくだろう。しかし、それは今の僕の手には余る課題である。1997 年の神戸での事件について言えば、「子ども」が「子ども」を殺し、それによって「社会」を挑発するという事態がどのような機制の上に成立したのかを、もう一歩踏み込んで考えてみなければと思っている。その構図が明確になるのは確かに「犯人」の逮捕後のことなので、そこにひとつの断層がある

かもしれない。

最後になったが、拙書に対して丁寧な評を寄せていただいた牧野智和さんに心から感謝の意を表したい。

（すずき　ともゆき　法政大学）